浦上の姉さん

キリシタン岩永マキ

4

新しい人 苦難越え慈善の道

解き放たれ 芽生えた自我

キリシタンであることを咎に長崎を追われ、「旅」に出た岩永マキ（1849～1920）たちが、夢にまで見た故郷は、変わり果てていた。禁教の高札撤去（1873年）により浦上の人口の大半を占めた信徒が帰還するまでの3年超の間に、耕し手のいない田畑は雑草に覆われ、多くの空き家が損壊した。戻ってきた信徒の300戸以上が住む家さえなかったという。

マキは不屈の人だった。晴れてオラショを唱えられる日々に、心が解き放たれたように感じたのだろう。厳しい現実にも「初めて天国に帰ったような思いが致しました」（1910年、東洋日の出新聞）と喜んでいる。

＊＊

農具がないため棒や茶わんのかけらで荒野を掘り返した信徒もいたというほど貧しかった浦上に、帰郷のわずか翌年、さらなる苦難が追い打ちを掛ける。7月に伊王島で発生した赤痢が飛び火したのだ。

復興途上の衛生状態では、まん延は時間の問題だった。浦上の患者を救おうと、医療の知識を持ち伊王島でも救済活動を行ったフランス出身のド・ロ神父が支援者を募った。マキは真っ先に買って出た。若い女性信徒たちも続いた。

8月、風速60㍍の記録的な暴風雨も長崎を襲った。激しい風により、完成間もない長崎県庁舎が倒壊。浦上に並んでいたキリシタンたちの掘っ立て小屋もつぶれ、秋の収穫を待つ作物は流された。

＊＊

災禍は終わらない。赤痢が終息する頃、現在は埋め立てられて長崎市の一部となっている薩ノ尾島で天然痘が発生する。ド・ロ神父とマキたちは、島に渡り看護に当たった。

感染症が下火になり、浦上に戻る彼女たちの胸には、一人の幼女が抱かれていた。天然痘で両親を失い、泣きながら道をさまよっていたタケだった。タケを抱き上げたマキたちは「育てんばさ」と言い合い、養育を決意したという。マキの生涯にわたる取り組みは、この出会いから始まった。

＊＊

赤痢救済に当たった当初、マキたちは、彼女たちの家族への感染を心配した信徒から納屋の提供を受け、女性4人で共同生活を始めた。暮らしは貧しかった。狭い板の間にむしろを敷き、1枚の布団を交代で掛け、芋としょう油かすで飢えをしのぎ、たまに作るみそ汁を一つしかない欠けた茶わんで飲み回した。

彼女たちはド・ロ神父の支援を受けるなどして田畑や子どもたちを育てるための家を得ると、農作物を作り、神父の指導による信仰生活を整え、後に「十字会」を結成する。子どもたちの家はやがて「子部屋」と呼ばれ、彼女たちは「姉さん」と慕われていく。

＊＊

元東京純心女子大教授の米田綾子さん（社会福祉）によると、近代以降の日本の児童福祉は、松方正義が日田県知事時代に堕胎の風習の防止などのために取り組んだ日田養育館（1869～73年）や、体系的な教育思想を取り込み「児童福祉の父」と呼ばれた石井十次（宮崎出身）の岡山孤児院（1887～1926年）が嚆矢。支援が必要な人たちを国や自治体が助ける社会福祉と比べ、目の前の困っている人に個人の善意によって手を差し伸べたマキたちの活動は、その前形態の慈善という段階に当たると言える。

マキは農民として暮らし、人生で最も大切な青春期を鶴島に流され、つらい体験をした。迫害の中、信仰を守らなければならないという強い思いで耐え忍んできたが、マキの評伝も書いた米田さんは「苦しい体験を通し、彼女自身、どう生きるかを考えるようになったのではないか」とみる。

仲間と手探りで子どもを助けようとしたマキの姿に、米田さんは「女性として、人間としての自我の芽生え」を感じるという。マキは、封建時代の禁教下に抑圧された精神を、辛苦を乗り越えることで昇華させて自らの道を歩んだ、近代が生んだ「新しい人」だったのかもしれない。

（藤原賢吾）

岩永マキ（中央の柱の隣）と十字会会員や孤児たち。手前には乳児が横になっている

近代百五十年

浦上の姉さん

キリシタン岩永マキ

5

家族　養育院　命を守り

原爆はあった　それでも

病床に臥していた福岡市の高齢女性の枕元に、いつも4、5枚の写真が置かれていた。ある日、娘が「お母さん、この人誰？」と尋ねると女性は切り出した。

「実はね…」

女性は死期が近いと悟っていたのか。初めて出自を明かした。「この人は私を育ててくれた人。お母さんは孤児だったんだよ」

その1枚に、若き日の岩永マキ（1849～1920）が写っていた。

写真は数年前に、マキの遠縁に当たる岩永勝利さん（82）＝長崎市＝の手に渡った。「マキだ！」。勝利さんは驚いた。20代半ばだろうか。これほど若いマキの写真を見たことがなかった。マキの資料は、浦上養育院の火災や被爆でほとんど焼けている。

焼失を逃れ奇跡的に親族が手にした貴重な1枚。連載の題字にあるマキの写真がそれである。

＊　＊

先祖から受け継いだ信仰を「旅」の苦難の中でも守り通したマキ。孤児救済に尽くした力の源に、キリシタンの教えがあったことは想像に難くない。

マキ自身、「神の教えに基づき世の不幸な子供を助けんとの念願を発しましてからはその子供達を慈しみ育てる為に（後略）」（1910年、東洋日の出新聞）と語っているように、隣人愛の精神などから、手を差し伸べずにはいられなかったのだろう。

マキたちは、間もなく亡くなるような孤児も引き取り、洗礼を施した。元東京純心女子大教授の米田綾子さん（社会福祉）によると、当時は洗礼を授からなければ救いがないと考えられていた。「マキたちは子どもの命を大切にした。路上で亡くなる人たちに、最期にきちんとしたベッドと食事を与えたマザー・テレサと通じる」。

一方、育てた子どもに信仰の強制はしなかった。

＊　＊

マキの元で育ったという素性を隠すため、姓を変えようと苦心する孤児もいた。マキはそんなわが子の姿を見聞きすると「不憫で堪りません」（同新聞）と心配した。

1920年、マキはインフルエンザにかかり亡くなった。マキを送るために、マキを慕う「子、孫」ら約2500人が集まり、葬儀の執り行われた浦上天主堂から約2キロ離れた墓地まで葬列が続いたという。

＊　＊

マキの死から25年、長崎には惨禍が待っていた。

1945年8月9日午前11時2分。浦上の上空約500メートルで原爆がさく裂。一面焼き尽くされ、約7万4千人の命が奪われた。爆心地から約500メートルの天主堂は崩れ、1・5キロほど離れた養育院も全壊した。養育院を運営していた十字会の会員22人が死亡、乳児3人も犠牲になった。

養育院で育った田中ヤスヨさん（84）は小学5年生だった。押し入れでげたの鼻緒を直すための布を探していた。共に暮らしていた一つ年上の友達が、「飛行機の音が変よ」と近くで言った瞬間、ピカッとした。

田中さんはかすり傷で済んだが、友達は割れたガラスで足に深い切り傷を負い血だらけになった。外は土ぼこりで何も見えず、地面に散乱した瓦を踏んで近くの防空壕に逃げ込んだ。

やけどした人、服がぼろぼろになった人、傷だらけの人。集まった誰もがわんわん泣いていた。はだしのまま皆で山の上の方へ逃げた。夜になって下りてくると、近くの病院も養育院も燃えていた。

田中さんたちの世話をしてくれた「姉さん」の一人は、役所から養育院に戻る途中で被爆し、3日もかかって帰り着き、2週間後に亡くなった。苦しそうだった。

生き残った養育院の子どもと姉さんたち十数人は、焼け跡に建てた小屋で一緒に寝た。布団は足りない、着る物も食べる物も何もない。髪も洗えない。シラミが沸くからずっと掻いていた。そんな生活が1年以上。助け合って何とか生き抜いた。

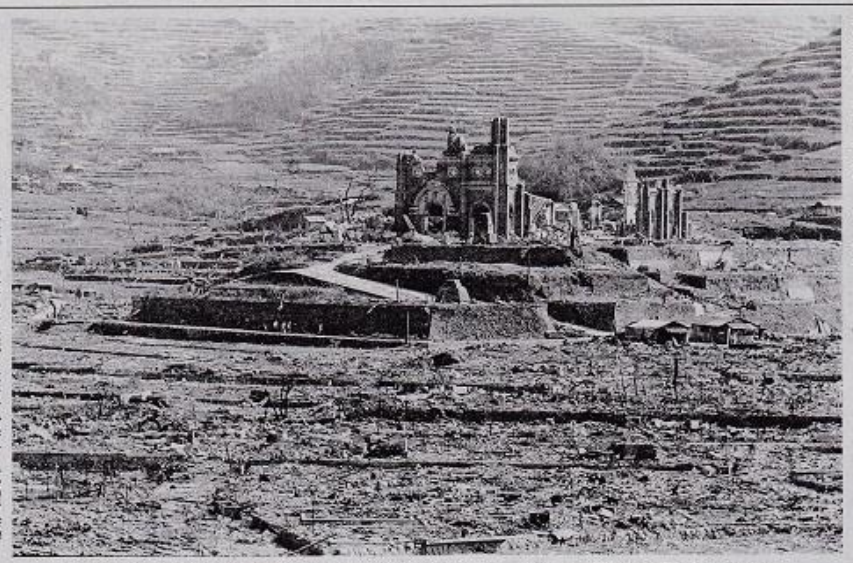
戦後、田中さんは成人するまで養育院で過ごすと、熊本市の児童養護施設で働いた。でも、1年で戻ってきた。養育院が恋しかった。浦上から離れられなかった。一時は養育院でも働き、近くに住み続けている。

被爆した時そばにいた友達とは毎日一緒に学校に通い、姉妹のように仲がいい。姉さんは優しくて、皆とよく遊んだ。

マキが種をまいて育んだ養育院は、数多くの子どもたちの命を守った。田中さんもそう。原爆はあった。それでも、「家族」との楽しい思い出が人生を支えてくれた。「私は、養育院にいて本当に幸せでした」

（藤原賢吾）

＝おわり



（撮影・林重男氏、長崎原爆資料館所蔵）

原爆によって破壊された浦上天主堂（中央）。辺り一面焼き尽くされた

▶現在の浦上養育院。門の前には岩永マキと子どもたちの像が立っている　＝長崎市

近代百五十年